

— 1. 支部長挨拶 —

(公益社団法人) 日本気象学会北海道支部 支部長 高野 清治

本日は、ご多用の中、総会にお集まりいただきありがとうございます。また会員の皆様には、日頃より気象学会北海道支部の事業運営にご協力をいただきお礼を申し上げます。

私は、この6月6日に開催されました日本気象学会北海道支部の平成25年度第1回理事会において、第29期の支部長を仰せつかりました高野です。皆様からご支援・ご協力をいただきながら、北海道支部の発展のために微力ではありますが最善を尽くしたいと考えていますので、どうぞよろしく願いいたします。



さて、この数年を振り返りますと、我が国は、多くの自然災害に見舞われました。一昨年7月の平成23年7月新潟・福島豪雨、9月の台風12号、一昨年から昨年にかけての大雪、昨年5月6日につくば市を中心に大きな被害をもたらした竜巻害、今年3月の道東を中心に9名もの尊い命が奪われた暴風雪など、それぞれに自然の猛威を再認識させられました。

とどまることなく進展する情報化社会の中で、自然における極端現象による災害を減らし、安全な社会生活を維持するため、気象・気候現象のさらなる究明と、予測精度の向上が求められています。

また、気象庁、アメリカ海洋大気庁によりますと、大気中の二酸化炭素は着実に増え続け、気温上昇量を2度程度に抑えるための上限とも言われている400PPMを一時的に超えるようになってきています。この二酸化炭素増加に伴う気候変動等の地球環境問題についてもさらに研究が求められていると思われます。

さて、昨年10月には、日本気象学会の創立130周年の節目の年に札幌において気象学会の2012年秋季全国大会が開催されました。全国各地から800名を超える会員の方々にお集まり頂き、発表件数は一般講演442件、スペシャル・セッション97件、総数539件にのぼります。多くの皆様にご参加頂いたことを、心から感謝申し上げます。

特に、大会では、「気象学が地域の未来にいかに関与できるか？」と題して、北海道における気象を活用した地域づくりに気象学がどのように貢献できるかについて、初めて自治体の首長や担当者を交えて公開シンポジウムを行うことができ、活発な議論を行うことができました。

日本気象学会は、今年4月から公益社団法人としてスタートしております。

「公益社団法人及び公益社団法人の認定等に関する法律」第2条の中で、「公益目的事業」として認められるのは「学術、芸術、慈善その他の公益に関する事業であって、不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与するものをいう。」とされており、学術及び科学技術の振興を目的とする事業などとして気象学の進歩を通じた社会への貢献は、従来と変わる事無く、むしろ、分野の異なる研究者がそれぞれの力を学会という枠組みの中で出し合うことで大きな貢献につながるという意味で、より重要になってくると思っています。特に、広い分野・さまざまな角度からそれぞれが連携して研究、教育、応用を進めていくことは、気象学会のまとまりと、会員の裾野を広げるためにも重要と考えております。このような考えを念頭に、今年度におきましても、これまでの取り組みを引き続き継続・発展させたいと考えております。

一方で、Webの普及や気象予報士制度の充実等の社会情勢の変化にも、支部としても的確に対応すべく、情報交換や情報発信とその改善に努めていく所存です。

会員の皆様には、益々のご配慮とご鞭撻を賜りますようお願いして、ご挨拶といたします。